



ステファン・シェイムス「ニュー・ヘブン・カントリー裁判所前にてデモ活動
ポビー・シールとエリカ・ヒューギンズの裁判中」1970年5月1日
© Stephen Shames / Steven Kasher Gallery

THEME of 2018 UP

〔開催概要〕

名称：KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2018

（英語表記：KYOTOGRAPHIE

International Photography Festival 2018）

会期：2018年4月14日〔土〕-5月13日〔日〕

◎プレス向け内覧会：4月13日〔金〕

主催：一般社団法人 KYOTOGRAPHIE

共催：京都市（予定）、京都市教育委員会（予定）

メインスポンサー：ビー・エム・ダブリュー株式会社

スポンサー：シャネル株式会社、ルイナール（MHD モエ ヘネシー
ディアジオ株式会社）、富士フイルム株式会社、株式会社マツシマホ
ルディングス 他（次回のプレスリリースで全てのスポンサー一覧を発表）

KYOTO
GRAPHIE

international
photography festival

京都で開催される写真フェスティバル「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2018」のプレスリリースをお送りします。貴媒体にて情報のご掲載やアーティストへの取材をご検討いただけますよう、宜しく申し上げます。

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2018 開催のご案内

第6回テーマ「UP」

国内外の気鋭のアーティストが、寺社や京都市内の
趣きあふれる建造物にて新作や撮りおろしを発表

世界屈指の文化都市・京都を舞台に開催される、日本でも数少ない国際的な写真祭「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」。国内外の重要作家の貴重な写真作品や写真コレクションを、趣きのある歴史的建造物やモダンな近現代建築の空間に展示する本写真祭も、回を重ねるごとに好評を博し第5回までに約38万人の方にご来場いただき、2018年に第6回目を開催する運びとなりました。

2018年のテーマは「UP」です。現在、私たちは個人においてもグローバルな局面においても、様々な問題に直面しています。私たち一人一人が行動や創造を通じて、自身や世界を変えていくことができるよう、KYOTOGRAPHIE2018は、ポジティブに目線を上げ、全方位的な原動力と出会うことのできるプラットフォームへと皆様を誘います。

プログラムを通じて様々な「UP」に出会い、KYOTOGRAPHIEに集うすべての人々が多様な価値観や精神性を共有することで、一人一人が「UP」できることを願っています。

（KYOTOGRAPHIE 共同創設者 / 共同代表 ルシール・レイボーズ & 仲西祐介）

スペシャルイベントやキッズワークショップなど、 様々なプログラムを開催

例年来場者から好評いただいている様々な関連プログラムが数多く開催されるのも、KYOTOGRAPHIEの見どころの一つです。

・来場者向けイベント

アーティストトーク／数カ所の展覧会を廻る週末ガイドツアー／体験型ワークショップ／コンサートなどのスペシャルイベント

・若手育成プログラム

インターナショナル・ポートフォリオレビュー：キュレーターなど各国の写真界の第一人者に希望者がポートフォリオを見てもらい貴重な機会を提供

マスタークラス：参加作家が学生・アマチュア・プロに向けた授業を開催

・キッズプログラム

お子さまや親子連れにもフェスティバル（＝お祭り）を楽しんでもらえるよう、キッズワークショップなどのキッズプログラムも充実

プログラム

EXHIBITIONS

1. 深瀬昌久 | Masahisa Fukase (日本)

2. アルベルト・ガルシア・アリックス | Alberto Garcia-Alix (スペイン)

3. ジャン＝ポール・グード | Jean-Paul Goude (フランス)
presented by BMW
with a special CHANEL × GOUDE highlight

4. ローレン・グリーンフィールド | Lauren Greenfield (アメリカ)

5. ロミュアル・ハズメ | Romuald Hazoumè (ベナン共和国)

6. フランク・ホーヴァット | Frank Horvat (フランス)
「Un moment d'une femme」 presented by CHANEL NEXUS HALL

7. K-NARF (フランス)

8. ギデオン・メンデル | Gideon Mendel (南アフリカ)
「Drowning World」

9. 宮崎いづ美 | Izumi Miyazaki (日本)

10. 森田具海 | Tomomi Morita (日本)

11. 中川幸夫 | Yukio Nakagawa (日本)

12. 小野規 | Tadashi Ono (日本)

13. ステファン・シェイムス | Stephen Shames (アメリカ)
「Power to the People」

(追加プログラムを2018年2月頃に発表予定)



01
「遊戯」1991年
© Masahisa Fukase Archives



02
「2人の女性」1988年
© Alberto Garcia-Alix



03
Grace revised and updated, painted photo, New York, 1978
© Jean-Paul Goude



04
Iona at home with her daughter, Michelle, 4, Moscow, 2012
Lauren Greenfield/INSTITUTE



05
「Pied a terre」2004年
© Romuald Hazoumè. Courtesy October Gallery, London.



06
For "STERN", shoes and Eiffel Tower, 1974, Paris, France
© Frank Horvat



07
「TAPE-O-GRAPHS from the HATARAKIMONO PROJECT」2017年
© K-NARF 2017



08
「フローランス・アブラハム、イエナゴア、バイエルサ州、ナイジェリア」2012年11月
© Gideon Mendel / Drowning World



09
「riceball mountain」2016年
© 2016 IzumiMiyazaki



10
「天神峰、成田、千葉」2017年
© Tomomi Morita



11
「聖なる書」1994年
© Nakagawa Yukio



12
COASTAL MOTIFS, 2017-2018 (#9183, 若手県大船渡市)
© Tadashi Ono / Villa Kujoyama



13
「行進中のバンサーズ」オークランド、1968年7月28日
© Stephen Shames / Steven Kasher Gallery

国内外の気鋭のアーティストの新作や

貴重なコレクションを発表

(カッコ内の数字は前ページのプログラムリスト参照)

・写真家、グラフィックアーティスト、デザイナー、映像監督など多岐にわたり活躍し、イメージメーカーとして名を博している**ジャン＝ポール・グード**(3)。セクシャリティやユーモアを取り入れた前衛的かつ快活なスタイルを80年代から現在にいたるまで確立し、幻想的な作品やアイコニックな広告を数多く創出しました。数々の有力誌や有名ブランドとコラボレーションし、現在も人々を魅了し続けている稀代のアーティストの写真作品やインスタレーションが展示される国内初の本格的な個展です。

・**深瀬昌久**(4)は、1986年に発売後人気を博し、その後入手困難となった伝説の写真集『鴉』が今年イギリスの出版社 MACK から再販されるなど、近年国際的に再注目されている写真家です。ポートレート作品などのほか、ひび割れの写真に深瀬自身がペイントを施した「HIBI」や「BEROBERO」シリーズなど、抽象的な作品群も展示予定です。1992年にパーの階段から転落、この事故により重度の障害を負い活動を停止し、そのままカメラを握ることなく2012年に他界した深瀬の作品は、身近な者を被写体としながらも「自分とは何か?」「写真とは何か?」という普遍的な問いを投げかけます。他界してもなお後世に圧倒的なパワーを放ち続けている、日本を代表する写真家の貴重なヴィンテージプリントを含む国内初の没後回顧展です。

・**フランク・ホーヴァット**(6)は、1950年代からファッション写真の表現に新風を吹き込み、このジャンルの黄金期を担った写真家の一人として知られます。国内初の本格的な個展となる本展覧会では、『女性』を切り口に、後世に多大な影響を及ぼしてきた代表作や、ジャーナリスティックな初期作、私的なプロジェクトによる作品などが出展される予定です。(シャネル・ネクスス・ホール [会期: 2018年1/17 - 2/18] からの巡回展となります。)

・1918年生まれの**中川幸夫**(11)は、池坊から脱退後、流派という垣根を飛び越え、「いけ花」という概念を凌駕するような独創的かつ前衛的な作品を発表し、2012年に他界するまで精力的に創作を続けました。中川は一輪の中に内包されている花のかすかな命を作品の中に抽出し、その先にある死までも表現します。そしてそれを自身が写真に焼き付けることで、その世界観を後世にまで知らしめました。本展のキュレーターの片桐功敦は花道みささぎ流の家元を24歳で襲名し、伝統から現代美術的なアプローチまで、幅広く活躍を続け、尊敬してやまない中川へのオマージュ作品なども発表しています。本展では、両足院(建仁寺内)にて、中川自身が撮影した写真作品や書を展示するとともに、中川作のガラスのオブジェに片桐が花をいけるインスタレーションを発表予定です。真摯に花と対峙することで、真の自由とは何かを追い求め続けた中川への片桐の讃歌とも言える展覧会です。

情緒あふれる建造物にて、作品の世界観にふれる

丹波口エリア (京都市中央市場場外)

京都の食文化を支える「京都市中央市場」の「場外」と呼ばれ、江戸時代の文化的サロン島原からも近い丹波口エリアの商業建築等。

京都文化博物館 別館

東京駅など明治の名建築を多数設計した辰野金吾が弟子と設計した、赤煉瓦の瀟洒な建築物。

両足院 (建仁寺内)

通常非公開。京都府指定名勝庭園で池泉廻遊式庭園が有名。

菅田屋源兵衛 黒蔵/竹院の間

通常非公開。京都室町で創業280年を迎える老舗帯匠の蔵(黒蔵)と、竹の紋様の襖の意匠が美しい板張りの間(竹院の間)。

・高校生のとき何気なく写真部に入った**宮崎いづ美**(9)は、大学在学中に自分自身をモデルとして撮影し、作品をインターネット上のTumblrにて発表、世界中で注目を集めます。日常的な風景や身の周りにあるものと自身とを組み合わせ生まれたセルフポートレートは、ユーモアや劇的な風景、世界を俯瞰的に捉える眼差しが交差し、社会に対しての批評的なメッセージにも読み取れます。アメリカの「Time」誌やフランスの「リベラシオン」誌などでも取り上げられ、海外の人気も高まっている1994年生まれの新星が、新作を含む作品群を展示します。

・アフリカを代表する現代美術家の一人である**ロミュアル・ハズメ**(5)は、2007年のドクメンタ12にてアーノルド・ボーデ賞を受賞するなど、国際的に第一線で活躍しています。彼の故郷であるベナン共和国には、数百年にわたり奴隷貿易により住民が世界各国に売られたという苦い歴史があり、アゾウメは現代もお変わらず続くアフリカの不平等な現状を表現した作品を制作・発表し続けています。アゾウメの日本初の個展となる本展では、アフリカという土地・歴史・アイデンティティのメタファーである2つのシリーズを、写真作品およびインスタレーションにて発表します。一つは、ベナンの交通網を悪化させ経済を停滞させている要因となっている、ガンリンを自身で運ぶ人々により発生する交通渋滞の驚くべき姿を収めた写真作品のシリーズ、もう一つは、極彩色の衣装と仮面を身にまとい舞うことで祖先の魂の化身が乗り移り、個人や家族や共同体の安寧を願う「Egungun (エグングン)」というヴードゥー教の祭祀を捉えた、全く異なる世界のポートレートのシリーズです。

・**ギデオ・メンデル**(8)の「Drowning World」は、地理上の境界線や文化の壁を越えて発生する洪水災害に直面した人々の局面を捉えた作品群です。洪水が起きると暮らしは大混乱に陥り、日常生活は中断されます。メンデルはこの10年に13カ国で発生した洪水を撮影し、一人一人にもたらした影響を捉えました。ポートレート・映像作品・現地で収集した水没した写真にて構成された様々な物語からなる彼の作品は、温暖化が世界にもたらす危うさと、世界は変わらずあるという盲信への疑問を私たちに投げかけます。

・「We want freedom.」「We want justice.」 — 10の宣言と信条を掲げ、1966年10月、「ブラックパンサー」はアメリカのカリフォルニア州でアフリカ系アメリカ人らにより政治組織として結成されました。その背景には、改善されることのない人種差別やいじめなき暴力事件があり、自由や正義、そして人間としての生まれながらの尊厳を求め、彼らは立ち上がります。当時学生であった**ステファン・シェイムス**(13)は、共同創設者のポビー・シールを始め、彼らと友好的な関係を築き、団体のすべてのセクションへ出入り自由となり、ブラックパンサーのすべてを写真に収めます。ドキュメンタリーという枠を超えた本作「Power to the People」は、音楽や文化にも影響をもたらした社会運動の真髄をとらえた貴重な作品群です。

サテライトイベント

「KG + (ケージープラス)」では 市内約60箇所での写真展が集結



国内外から写真・アート関係者が多く来京するこの時期にあわせ市内各所のギャラリー、カフェ、教育施設など約60カ所が同時多発的に開催する写真展は、サテライトイベントKG+(ケージープラス)として集結します。最優秀出展者に与えられるKG+AWARDは、若手写真家の登竜門となるべく海外からも注目される賞となりつつあり、次年度のKYOTOGRAPHIEへの参加など、次代を担うアーティストへ継続的な支援を行います。

お問い合わせ、取材のご依頼、掲載写真のご利用は
下記までお問い合わせください。

KYOTOGRAPHIE 事務局 (2016年10月に下記住所に移転しました)

http://www.kyotographie.jp | Tel & Fax. 075-708-7108

〒602-0898 京都市上京区相国寺門前町670番地10

◎ PR: press@kyotographie.jp

(ファッション・ライフスタイル)

須田千尋 (CHIHIRO SUDA INC) | chihiro@chihirosuda.com

(アート・カルチャー) 市川靖子 | yasuko.ichikawa@kyotographie.jp

◎ 関西 PR 担当:

(日本語) 木藪 愛 | ai.kiyabu@kyotographie.jp

(英語・フランス語) Marguerite Paget | marguerite.paget@kyotographie.jp